

特集

第六十二回日本保育学会から

病児の不安を緩和するための入院パンフレット

その制作・効用・改訂について

大沼郁子

はじめに

A病院のB女医から「子どもが入院の際に抱く不安感を緩和するような絵本を紹介してほしい」とメールがあつたのは、二〇〇六年二月のことでした。すぐ絵本を担いでA病院を訪れましたが、B女医は「どれも直接的ではない」と不満げです。つまり、A病院独自の入院案内のパンフレット（以下入院パンフ）がほしい、でも、それにどのような情報を盛り込むのがよいのかわからない、という状態でした。

調査

部外者の私はずっとわかるはずがないと思つて、たところ「ボランティアとしてA病院で過ごし、自分の目で何が必要か見てほしい」と頼まれました。そこで二〇〇六年三月二十日から二十九日までの十日間、私はA病院の小児科病棟で過ごし患児にとつて何が不安なのかを調査しました。しかしこの時、この入院パンフを欲していたのはB女医だけで、ほかの看護師や医師たちには、私が誰で何の目的で来

たのか周知徹底されてなかったため居心地の悪いこと、このうえもありませんでした。それでも患児や保護者から、入院時の不安や知りたかった情報を、おしゃべりや遊びを通して聞かせてもらいました。

私が病院の人間ではないことがわかると、いろいろな話をしてくれました。この時はっとしたのは、保護者たちが病院側から入院生活や病気についてなんの説明も受けていないと、言ったことでした。擁護するつもりはありませんが、そんなことはないはずです。しかし、病気のわが子を前に医療者から説明を受けても耳に入っていないことは、容易に想像できません。この入院パンフでは、親たちの心の状態も考えなくてはならないと思いました。

すでに配布されていたチラシには「持ち物・病棟図・日課」がありました。私は病棟での聞き取りや他病院での調査を経て、この三つを含め十二項目にまとめました。必要な情報をただ箇条書きにして

も、子どもは手に取りません。そこで、各ページに手で触れる仕掛けをつくることで、視覚にも訴えるようにしました。

問題点

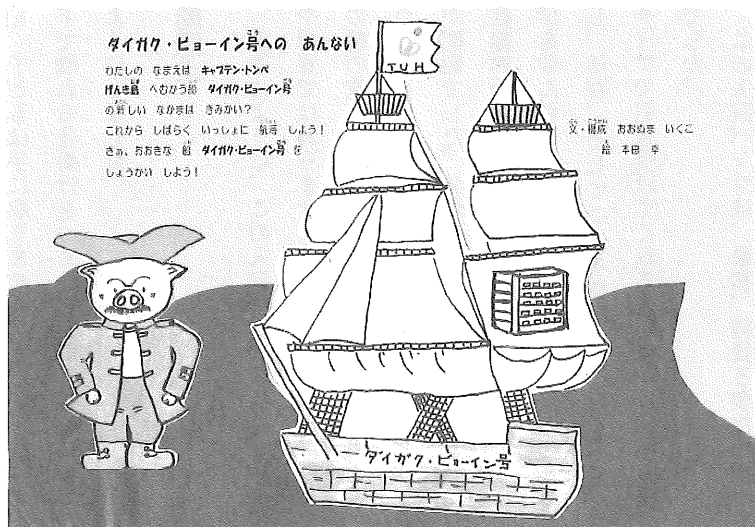
前述のように、この入院パンフは病棟全体の要望や総意ではありませんでした。ですから、制作とその後改訂時には、他病院の医療者の協力を得ました。さらに経費は○円なので、絵描きをどうするか問題でした。私が頼んだのは、十年以上の幼稚園教諭の経験があり、大学院時代の同級生で共に児童学を学んだ本田幸さんでした。子どものことを理解し、学び、そしてこの手間のかかる作業をボランティアで引き受けてくれる人をほかには知りませんでした。

この入院パンフは、最初、経費と製作作業を私個人が負担し、カラーコピーのステープラとじの簡易

版で三十部を作りました(二〇〇七年四月)。その後、様子を見ながら改訂していきたくと考え、本田さんが看護師・患児・保護者へのアンケートを作成して協力をお願いしたのですが、病院側からのフィードバックが全く無いまま、さらに一年が経過しました。きつと不評だったのだろうと諦めていた時、A病院の医事課から、正式に病院オリジナルパンフとして発行したいので、印刷業者を介して三百部作成して無料配布する、と連絡がきました。これをきっかけに改訂を加えて発行することになりました(二〇〇八年四月一日発行)。

内容と改訂

①表紙 コンセプトを表現しています。対象年齢は六歳。19頁の絵本形式のパンフで、キャプテン・トンペというブタの船長が率いる船乗りたちが「ビューイン号」という帆船で「げんき島」に向



▲入院パンフレット表紙

かうというストーリーです。船旅にしたのは、退院や完治する日時を明確に伝えられないという医師のジレンマを表現するためです。

②ビョーイン号に乗るときに必要なもの カバンを開けると持ちものの絵が出てきます。改訂版ではカバンの裏にメッセージを書き込めるようにしました。

③ビョーイン号の掟 病院での日課です。守るべきルールも、このストーリーに合わせて「掟」としました。

④ビョーイン号のフェロー 医療スタッフの紹介です。初めての場所で、聞きたいことを誰に尋ねたらいいのでしょうか？ 大人だつて不安になります。そこで医師、看護師、受付、院外学級の先生、看護助手、理学療法士、心理士、ボランティア、栄養士、改訂後はさらに麻酔科医、ソーシャルワーカーを加え十一名のスタッフに加えて、

「じぶんのなかま」を描く欄も設けました。

⑤ナースステーション A病院のユニークな試みとして、患児たちが病棟内の放送設備で消灯コールをします。マイクに向かってその台詞が言える入院生活に慣れたことになるそうです。そこで、吹き出しにその台詞を入れ、一日も早く言えるようにしました。

⑥げんき島への道のり おおよその入院期間・病状・治療を説明するページです。これももつとも頭を抱えたところでした。患児や家族が知りたいのは「いつ治るか」であるのに、医療者はそれを断言することはできません。医師の「治った」という言葉を期待している患児や家族は、その医療者の当然の対応に不満を感じているということを知りました。そこで私は、「海図」を用いました。げんき島に向かう波を罫線に見立て、治療法を書き込めるようにしました。これは子ども向け

のカルテです。海図（治療計画）に従って旅（治療）すれば、げんき島に行く（退院する）ことができる。でも、台風の日（苦痛）や大きな魚（アクシデント）に出あうことがあるので、退院の日を断言することはできないけれどみんな頑張り、という意味を込めました。改訂後には新たに「けんさ島」や「しゅじゅつ城」を加え、「しんぞうカテールの山々」「CITのどうくつ」という検査内容説明のページを入れました。

⑦ビョーイン号の詩人スマイリー・ポエム 患児だけでなく、付き添いのお母さんたちの心の支えになる言葉を集めました。金子みすゞや八木重吉をはじめ、子ども向けには日本音楽著作権協会に規定の料金を払って「アンパンマンのマーチ」（やなせ・たかし詩）などを多数セレクトしました。改訂版には、自分の好きな言葉を書き込む欄も作りました。

⑧買い物 A病院は地元では最も大きな病院で売店もたくさんあります。改訂版では「あつたらいいなのお店」を設け、子どもたちが好きなお店を描き込めるようにしました。

⑨びょうとうの地図 わかりやすい入院パンフの中で、このページはわざとわかりにくくしました。七種類のキャラクターたちの台詞をヒントに病棟からキャプテン・トンペを探すという遊ぶ地図です。キャプテンの帽子が落ちている部屋に実際に行くと、そこにキャプテン・トンペのプレートが出迎えてくれるという仕掛けがあります。

⑩マダム・ブツクの本だな 絵本のブツクリストです。リストは本棚のポケットから取り出して見る仕掛けです。物語絵本、学習の絵本、病気・病院がテーマの絵本、命がテーマの絵本、そして付き添いのお母さんを励ます本というカテゴリにして、三十二冊をセレクトしました。改訂版では、

四十五冊に増冊しました。私はこのリストの最後に「一冊の絵本のちからは小さくても心を潤す一滴のしずくになりますように。暗い部屋を灯すほのかな明かりになりますように」という一文を入れました。これは私の入院パンフへの想いであり、折りでもあります。

⑪病院周辺の地図 これは家族のためのページです。地元住民でない家族の助けになればと思い、コンビニエンスストア、ファミリーレストラン、ドラッグストア、スーパーマーケット、菓子店、総菜・弁当屋、宅配ピザ、花屋、ホテル、美容院と全二十七軒に掲載の承諾を得ました。改訂版では家族のための滞在施設も加わりました。

⑫心の地図 患児が自由に描き込める心の地図を作りました。描いた絵を通して、言葉にできない患児の想いを看護師や心理士にくんでもらえたらと思っています。

おわりに

入院パンフの作成開始から、まもなく四年の月日が経とうとしています。私に依頼したB女医はすでにA病院を去り、相変らず医療者からの声はありません。医事課によれば、すでに二百部以上配布し、患児からは「おもしろい、楽しい」、保護者からは周辺地図が便利という反応があるとか……。

しかし、この入院パンフを対外的な見せかけだけのサービスで終わらせないためにも、フィードバックや改訂が必要です。今後、医療以外の他分野との協力によりこのようなツールが作られることで、医療者が「病気」だけではなく「心」を含めた子ども全体を見ることになるのではないのでしょうか。この入院パンフが、コミュニケーションツールとしても活用されることを願っています。

(日本女子大学大学院・宮城学院女子大学非常勤講師)